日本医史学雑誌第三十三巻第四号
昭和六十二年十月三十日発行

# 医史学と私

三浦豊彦

## はじめに

陸軍被服本廠から「はきもの」つまり軍靴の研究委託というより、むしろ研究命令が暉峻義等所長の労働科学研究所にきたのは昭和十五年（一九四〇）のことであった。勝木新次博士の指導のもとに私がこの研究を担当することになった。職場の履物の研究をかねて調査や実験を行なった。その間に履物の歴史の資料集めも行った。

昭和十七年（一九四二）に私は臨時名古屋第二陸軍病院に応召した。多数の脚気や栄養失調の病兵の治療を担当したので、脚気の研究をすることにして産業労働者の脚気に関連させて脚気の歴史も含めて四編の論文を陸軍病院で書いた。(一)

敗戦後、研究所に帰った私は軍靴から離れて履物研究の追加実験を行なっている。そして、昭和二十三年（一九四八）に勝木新次博士と私の共著で河出書房から新書判で『はきものの科学』(二)を出版した。私にとっては最初の著書であった。このなかでも私は和風履物の歴史資料などにもふれている。

このように私は戦前からいささか歴史に関心があったようである。

## 一　『扶氏長生法』

敗戦後の食糧不足時代で、まだ東京には戦災の傷跡が大きく残っていた。それでも時々、神田や本郷の古書店に足を運

んだ。金もないのでどんどん古書を購入できる状態ではなかったし、徳川時代の医書に関心もなかった。ところが神田の書店で小さな『扶氏長生法』を見つけた。当時は和医書の古書は極めて安価になっていたので、これを購入した。これが医史学関係の最初の購入書だった。

訳者は松本・辻恕介とあったが、私は扶氏とはだれかも知らぬような医史学に無知の状態だった。

中野操、大鳥蘭三郎両先生に扶氏とはだれか、訳者のことはわからないかというような手紙を出した。二人の先生からは親切な返事がきた。そして、扶氏はフーフェランドであることを教えられた。ただし、訳者についてはわからないということだった。中野先生からは『扶氏長生法』は武長図書館にもあるはずで、貴重な収穫とほめられた記憶がある。

それからしばらくして長野県に出張した。松本市の信州大学医学部前の古書店に寄った時、古医書はないかと聞くと、その店主が「惜しいことをしました、最近まで沢山ありましたが、製紙工場に売ってしまいました。少しなら残っています」という。土間に荒なわでしばった古医書があった。当時はこんな扱いをうけていた。この古医書を蜜柑箱一ぱい買った。家で調べてみたら、徳川時代の救急方書が含まれていた。多紀元悳の『広恵済急方』〔寛政元年（一七八九）〕、丹波元簡の『救急選方』〔享和元年（一八〇一）〕、芸州蘭江堂の『郷里急救方』〔享和元年（一八〇一）〕などが含まれていた。

前述の『扶氏長生法』の訳者が松本の辻恕介ということだったので、この書店で関係の本でもないかと探していたら、『男爵辻新次翁』という伝記が見つかった。この本から明治の文部次官をつとめたこの辻新次男爵の兄が恕介であったことが後になってわかり、『日本医事新報』でこのことを紹介した。(三) こんなことでなんとなく、徳川時代の養生書、衛生書を集める切っ掛けになった。

## 二　労働衛生史の研究

衛生史の研究から、なかでも労働衛生史の研究に次第に私の関心が移っていくわけである。労働科学研究所の暉峻所

長、桐原葆見文博（心理学）は二人とも学生時代、富士川游博士編集の雑誌の編集を手伝っていた関係であろう、日本医史学会の評議員であった。しかし、二人とも歴史には関心があったが、戦後は医史学会総会には出席する機会がなかった。

倉敷労働科学研究所時代の暉峻所長は留学中に大原孫三郎倉紡社長のポケットマネーで、ゲッチンゲン大学図書館から「ゲッチンゲン医学史文庫」約四千冊を購入した。今から考えると大金である。このなかにはハーヴェイ W. Harvey の "De Motu Cordis"[四] が入っていて、暉峻所長はこれを翻訳、岩波文庫の一冊になっている。生理学者でもあるのでこの一冊に非常に関心があったのである。

また、この「ゲッチンゲン医学史文庫」には労働衛生関係でラマッツィーニ Bernardino Ramazzini の『工人の病気』(De Morbis Artificum Diatriba)[五] が含まれていた。

そうした関係で暉峻所長は大正十四年（一九二五）に「労働科学研究の史的考察」[六] という論文のなかでラマッツィーニやラボァジエ、ペーター・フランクなどをとりあげて考察している。労働衛生史の初期論文ということになる。

一方、労働科学研究所の久保田重孝博士は職業病研究の専門家であったが、個々の職業病の歴史に関心があって、史料集めをしていた。その結果、その著『最近の職業病』[七] には『大葛金山金掘病体書』のような徳川時代の金山の珪肺の資料を初めて紹介している。この記載の臨床症状が余りに的確であったために、病体書の筆者の荒谷忠兵衛は大葛金山の医師としていたが、後になって私はこの荒谷忠兵衛は医師でなくて、山主であることを明らかにした。つまり徳川時代の鉱山の経営者が、珪肺対策に苦心したという一つの資料でもあった。

敗戦後は政策的に炭・鉱山、製鉄、肥料工業などの傾斜生産が行われていたので、こうした作業場の調査の機会が多くあった。ことに労働基準法や労働安全衛生規則が制定され、労働衛生思想が高揚した時期でもあった。

訪問した作業場で、歴史的な史料などを含めて資料を集めた。この時期にはまだ明治、大正、昭和初期の資料を集める

ことが不可能ではなかった。鉱山や炭鉱の友子同盟（鉱夫の共済組織）の資料などは徳川時代から続いたものがあった。三菱金属鉱山㈱の生野鉱山には徳川幕府の代官所記録も残っていて柏村儀作（故人）という郷土史家には生野鉱山史の研究のなかで、煙毒（珪肺）資料も明らかにして貰った。この協力がなかったら、生野鉱山の塵肺の歴史は余りはっきりしないうちに消滅したことであろう。

なお明治三十年（一八九七）創立の三菱金属鉱山の鉱夫共済組合病院の資料や写真は会社にもなく、生野の故老から入手したのであった。(八、九)

戦後はまだ戦前の製鉄所の高温作業場などが残っていた。そして、やがて、能率低下を防ぐために冷房その他の高温対策が進んでくるし、一方、技術革新が高温重筋的な作業を少なくして、製鉄所などはコンピュータの導入で、冷房したコントロールルームで作業を看視するようになった。鉱山の冷房もはじまった。こうした高温作業の歴史も自分の眼で実際に見てきたわけである。

公害で有機水銀中毒が社会問題になった時、水銀中毒の歴史もまとめてみた。まだ大正時代の計器工場などの水銀中毒を調査研究した先輩たちも活動していたので、実際に記録にはでていない話も聞くことができた。

当時、日本産業衛生協会（現学会）の南俊治理事長(一〇)が『明治以降・日本労働衛生史』を昭和三十五年（一九六〇）に著わした。著者が監督官の経験者でもあったので、主として労働衛生行政を中心にした最初の労働衛生史の単行本であった。

私は研究所の雑誌に「通説衛生史」(一一)を書きためていたので、昭和三十九年（一九六四）に新書判で『労働の歴史』をとりまとめた。職業病を中心にした労働衛生史であった。さらに、私は昭和五十一年（一九七六）から五十五年（一九八〇）にかけて「労働衛生学史序説（第一～三二部）を『労働科学』誌に連載した。これらの論文を中心にして、『労働と健康の歴史』第一～三巻(一三～一五)を著わした。さらに、書きおろしで第四巻(一六)と『労働と健康の戦後史』(一七)を出版した。その後、新し

い資料が集まって、追加を必要とする事項も多いし、訂正を要する点もあるので、補遺編の出版を考えているところである。

## 三　労働衛生史のための対談

労働衛生史に関連のある労働の実態は会社の記録や資料だけではわからぬ点も多いので、昭和四十年（一九六五）前後に現場で働いた労働者を対象に対談した。製鉄工、石工、製糸女工、国鉄機関士、東京土建労組の大工、鉱山労働者、印刷工、靴工、パイロット、電話交換手、看護婦、汽船の甲板員、操機員、司厨員、都電運転手と車掌、駅の赤帽、炭焼き、筏流手、海女などで、対談は『労働の科学』誌に掲載したが、まだ単行本にはまとめていない。しかし、一部は『労働と健康の歴史』にも引用した。

一方、労働衛生の研究や行政にかかわって実際に労働衛生史をみてきた先輩達とも対談した。鯉沼茆吾（元工場監督官、名大教授）、水津利輔（日本鉄鋼連盟理事）、大西清治（元工場監督官、珪肺労災病院長）、近藤正二（東北大教授）、古沢一夫（神戸大教授）、松下正信（元鉱山監督官）、勝木新次（元労研所長）、暉峻義等などの諸先生で、この対談も『労働の科学』誌に掲載した。

暉峻博士との対談は昭和三十七年（一九六二）に三回行った。写真（図1）はこの時のもので、労働科学の発足当時のこと、つまり、日本の労働衛生研究史の初期について聞いておきたいと思ったのである。第一回は二月、第二回は三月、第三回目は四月二十日に行った。

「僕は自分のことを話すのはきらいだが、大分年をとったので、君に何もかも話しておきたい」と先生はいっていた。

第三回目の対談の一週間後に、先生に脳卒中の発作がおこり、対談は不可能になった。そこで、倉敷労働科学研究所創立のところで話は切れてしまったのであった。後に追憶出版『暉峻義等博士と労働科学』[一八]にこの対談抄を載せておいた。

なお労働科学研究所の歴史については私が『労働科学研究所六〇年史話』(一九)をまとめており、これも日本の労働衛生史の一断面を示していると考えている。

日本人、全てが働く時代をむかえた現代は労働衛生史はまた生活史であるとも考えられる。

図1　暉峻義等博士〔明治22年（1890）～昭和41年(1966)，右〕と筆者の対談　（昭和37年撮影）

## 四　労働衛生現代史の必要性

労働衛生史の単行本としてはテレキィ Teleky, L.(二〇) のものがよく知られているが、ヨーロッパ中心であって、日本のことは全くふれていない。一方、日本の労働衛生史も欧米に眼をむけているのであって、アジアことに中国のことが脱落していることを反省している。たとえば明末の崇禎十年（一六三七）刊の宋應星の『天工開物』にはいくつかの労働衛生関係の記事があって驚くのであって、中国にも眼をむけたいと思っている。

その他、日本ではすでに見られなくなった職業病が発展途上国の職場でしばしばみられる。このような職業病についてはわが国がこれまで実行してきた対策が役立つと思われる。

こうした点を考えると、急速に変容していく、日本の労働条件や環境条件と健康についての現代史の記録はまた国際的に役立つことを忘れてはなるまい。

### 参考文献


（一）三浦豊彦「脚気に関する研究」第一～四編、『労働科学』第二三巻（第一～三号）、昭和二十二年（一九四七）

（二）勝木新次・三浦豊彦共著『はきものの科学』河出書房、昭和二十三年（一九四八）

（三）三浦豊彦「翻訳衛生書『扶代長生法』について」『日本医事新報』第一四九八号、一五一～一五二、昭和二十八年（一九五三）

(四) 三浦豊彦「暉峻義等とハーヴェイの De Motu Cordis」『科学医学資料研究』第一五〇号、一～八、昭和六十二年（一九八七）
(五) 三浦豊彦「労働衛生史関連の忘れられぬ資料(一)、ラマッツィーニ著『工人の病気』」『科学医学資料研究』第一二三号、七～一二、昭和五十九年（一九八四）
(六) 暉峻義等『労働科学について（その二）—労働科学研究の史的考察—』『労働科学研究』第一巻（第四号）一～二四、大正十四年（一九二五）
(七) 久保田重孝『最近の職業病』口絵と三〇七頁、山水社、昭和二十八年（一九五三）
(八) 三浦豊彦「生野鉱山の塵肺の歴史—一九世紀から二〇世紀—」、第Ⅰ部「徳川時代の生野銀山の煙毒」『労働科学』第六三巻（第二号）、六一～七六、昭和六十二年（一九八七）
(九) 三浦豊彦「生野鉱山の塵肺の歴史—一九世紀から二〇世紀—」、第Ⅱ部「明治時代から現代までの生野鉱山の煙毒、塵肺」『労働科学』第六三巻（第八号）、三八七～四〇九、昭和六十二年（一九八七）
(一〇) 南　俊治『明治以降日本労働衛生史』日本産業衛生協会、昭和三十五年（一九六〇）
(一一) 三浦豊彦『労働の歴史』（紀伊国屋新書B一九）、紀伊国屋書店、昭和三十九年（一九六四）
(一二) 三浦豊彦「労働衛生学史序説」第一～三二部『労働科学』第五三巻（第二号）～第五六巻（第五号）昭和五十一年（一九七六）～五十五年（一九八〇）
(一三) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第一巻—古代から幕末まで—労働科学研究所、昭和五十三年（一九七八）
(一四) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第二巻—明治初年から工場法実施まで—労働科学研究所、昭和五十五年（一九八〇）
(一五) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第三巻—倉敷労働科学研究所の創立から昭和へ—労働科学研究所、昭和五十五年（一九八〇）
(一六) 三浦豊彦『労働と健康の歴史』第四巻—十五年戦争下の労働と健康—労働科学研究所、昭和五十六年（一九八一）
(一七) 三浦豊彦『労働と健康の戦後史』労働科学研究所、昭和五十九年（一九八四）
(一八) 暉峻博士追憶出版刊行会『暉峻義等博士と労働科学』暉峻博士追憶出版刊行会、昭和四十二年（一九六七）
(一九) 三浦豊彦『労働科学研究所六〇年史話』労働科学研究所、昭和五十六年（一九八一）
(二〇) Teleky, L.: History of Factory and Mine Hygiene, Colombia University Press, 1948

（労働科学研究所・日本医史学会評議員）